

令和6年度 栃木県立那須拓陽高等学校 学校評価シート



校訓	耕学一如 冷暖自知
学校教育目標	教育目標 自律 創造 奉仕

スクール・ミッション 持続可能な食・農・環境・地域を目指す学習を通して、自らの力で人生を拓き、広く社会に貢献する人材を育成する学校
--

学 校 自 己 評 価					
学校自己評価実施計画			達成状況と改善策		
本年度の重点目標	具体的方策	方策の評価指標	方策の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策
○主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業の実践 (生徒の ICT 活用含む)	探究心を刺激する取り組みや、電子黒板をはじめとする ICT 機器などの活用によって、生徒の興味・関心をより高める授業を展開し、生徒自身も応用するなど、「主体的・対話的な学び」につながるよう工夫する。	生徒アンケート「情報端末（タブレット）など ICT 機器を有効活用しながら、自ら学ぶ意欲を持って授業をはじめとする学習に主体的に臨んだ」割合 ・70%以上 A ・50%以上 B ・50%未満 C	生徒アンケートで、A（そう思う）B（大体そう思う）が 60.7%であった。昨年度よりも電子黒板の活用が進み、Forms を利用しての意見の共有や、Teams を用いた課題の提出など、工夫が見られた。	B B	生徒のタブレット端末など ICT の効果的な活用を行うためにさらなる授業改善が求められる。また、ICT 活用に苦手意識をもっている教員に対する支援を行うことも必要である。
	生徒が新しい時代を生きるために必要となる「深い学び」の実現に向けた質の高い授業を行うため、同僚の授業を相互に参観し、授業技術の向上につなげる。	授業研究週間における年間の授業見学の回数（平均） ・5 回以上 A ・3 回以上 B ・3 回未満 C	授業研究週間（6 月・11 月実施）における授業見学報告書の集計結果対象職員平均 3.2 回		特に 11 月が 6 月と比べて半減に近く、昨年度 4.3 回、一昨年 3.8 回を下回る結果である。次年度は互いに見学しやすい時期を再検討する。また我々教員の更なる自己研鑽が望まれる。
○発達支持的生徒指導の充実（「させる指導」から「支える指導」へ）	相談しやすい雰囲気の中で面談を実施することで、生徒の様々な悩みに気づき、寄り添い、いじめ、不登校を早期発見し、未然に防止する。	生徒アンケート「相談できる先生がいる」生徒の割合 ・80%以上 A ・70%以上 B ・70%未満 C	生徒アンケートで「相談できる先生がいる」が 70.8%であった。昨年度に比べて 1.8%増加した。	B B	年 4 回の面接週間を設定し、生徒の悩み等を早期に発見できる体制をつくることができた。更に、担任・副担任だけでなく組織的に対応する体制づくりを推進していきたい。
	教育課程内外の様々な教育活動において、生徒の良さや可能性を見だし、生徒自身が自己存在感や自己肯定感を感じながら学校生活が送れるよう支援する。	生徒アンケート「学校生活の中で自分を好きになったり、自分が成長したと実感できたりしたことがある」生徒の割合 ・80%以上 A ・60%以上 B ・60%未満 C	生徒アンケートで、A（そう思う）B（大体そう思う）が 69.5%であった。		日常的な生徒指導や教育相談等の研修を通して、教員に発達支持的生徒指導の考え方が定着しつつあると考えられる。今後多様な生徒に寄りそいつつ、生徒の自己存在感を高められるようにしたい。
○キャリア教育の推進	高校 3 年間を見通し、各学年及び各学科に応じた進路ガイダンスや進路相談を通して、生徒の進路意識の高揚を図る。	生徒アンケート「進路意識の高揚」 ・90 %以上 A ・70 %以上 B ・70 %未満 C	生徒アンケート(2 学期末実施)結果「進路意識が高まった (36.0%)、ある程度高まった (54.7%)」計 90.7%(昨年比+3.3%)	A	昨年よりも+3.3%向上している。今後も、継続して生徒の進路意識を高揚出来るように指導法の改善を図る。
○5 学科の特性を生かした連携の深化	学科間相互の調整を図りながら、校内・地域社会での連携や協働できる場面をより多く提供する。また、活動を通し得られた実践的・体験的な学びが、先を見据え持続可能な社会に貢献できる広い視野を養う。	生徒アンケート「市や企業との協働など、各学科が特色を活かした活動をしている」割合 ・90 %以上 A ・70 %以上 B ・70 %未満 C	生徒アンケートで、A（そう思う）B（大体そう思う）が 91%であった。各学科の活動が生徒に認知されている。	A	これまでの取組が定着している。今後は、活動場面で得られた学びを探究につなげ、社会貢献できる人材育成のために各学科の創意工夫も必要である。

学校関係者評価
実施日 令和 7 年 1 月 21 日
評価委員からの評価・意見等
・ I C T の活用について義務教育から比べたら少ないようにも感じるがタブレットばかりではなく対話での授業展開もアットホームな雰囲気があり調和がとれていると感じた。 ・ 授業研究週間報告について最高値を 5 回以上にする必要があるのか。先生方の働き方改革を考えれば 3 回以上で十分ではないか。
・ 生徒アンケート結果より学科別生徒の回答に差があると感じた。また学年間でも差はあるが、学年が上がる毎に信頼関係が構築されているのはとても良い。1 年生の体制づくりもさらに推進していただきたい。
・ 生徒の未来は明るいと感じた。今後も色々な見聞を広め他人の 1 歩ではなく自分の 1 歩であって欲しい。
・ 各学科の特性を生かした取り組みや生徒の探究については大学よりも先進的に行われているように感じる。地域密着型で素晴らしい。拓陽高校と関わりたいと思っている企業も多数ある。